

1-2-15b言語／言葉

「言語」の第2弾。

「分節行為」の後半です。

ここでは、分節と言語のかかわりについてお話しします。

①分節

すべての生物は、生きるために、この世界を分節しなければなりません。

そのほとんどが、**本能**という遺伝的に組み込まれた行動パターンで行われています。

が、人間は、本能ではなく、**文化**によって世界を分節しているといわれます。

その文化を成り立たせているものこそ、言語です。

vi) 名付け：分節→言語

毎日の通学路。

前を通ると、小屋から出てきて、うれしそうに尻尾を振る白い犬がいたとします。

その犬をいつのまにか勝手に「シロ」と呼ぶようになるかもしれません。

私たちは、世界のある部分と深くかかわると、その部分を他から分節し、そこに名前を付けます。

その分節された中身が「**概念**」、付けられた名前が「**言葉**」です。

言葉は名付けから始まります。

「**言語**」というのは、簡単にいえば、そうやって生まれた言葉が体系化したものです。

名付けは、実は、きわめて日常的に行われています。

ペットの犬や猫に名前を付ける。

先生や友達にあだ名を付ける。

いい意味でも、悪い意味でも、自分の生と深くかかわったものや人に対して、私たちは名前を付けてしまいます。

名前には、自分の生とかかわる、何らかの特別な思いが込められているのです。

ということは、、、

君自身が名前をもっているのも、両親の生にとって特別だからです。

現在私たちが何気なく使っている言葉も、人間の生と深くかかわる特別なものとしてある時世界から分節され、誰かに名付けられたものが、いつしか一般化したものです。

だから、人間の生とのかかわりが薄くなると、その言葉は死語として忘れ去られます。

vii) 文化：言語→分節

といつても、自分が名付けた言葉などわずかで、私たちは、すでに言語のある世界に生まれてきて、それを身につけていきます。

言語を学ぶとはどういうことなのでしょうか。

たとえば、ちっちゃい子が散歩中柴犬を見かけて、お母さんから「ワンワン」という言葉を教わったとします。

でも、教えられたからといってすぐに使えるようになるわけではありません。

散歩中に見かけた他の動物に対して、たとえば三毛猫を見て「あれはワンワン？」と聞くかもしれません。

お母さんがセントバーナードを指さして、「あれもワンワンよ」と言うのにびっくりするかもしれません。

その繰り返しのなかで、その子は、「ワンワン」という言葉が世界のどこからどこまでを区切る言葉なのかを学んでいきます。

言語を学ぶとは、言葉がどのように世界を分節しているのか、を身につけるということです。

たしかに、言葉は、世界が分節されることで生まれてきますが、言語を得た私たちは、逆に、言葉によって世界を分節するようになったのです。

分節とは世界を認識することですから、私たち人間にとて、言語こそが世界の見え方を決定するものだといえます。

viii) 言葉がものをあらしめる

だから、「言葉」こそが「もの」をあらしめています。

もともと「もの」があって、その「もの」に名前が付いている——と、もしかしたら、君たちは素朴に思っているかもしれません。

が、「ワンワン」という言葉を教えられる以前の子供にとて、「ワンワン」は存在したでしょうか。

「ワンワン」以前、柴犬と三毛猫は何となく同じもので、セントバーナードとゴジラの区別はついていなかったかもしれません。

しかし、「ワンワン」という言葉を知ることで、その子の生きる世界に、柴犬とセントバーナードを一括りにできる「ワンワン」は初めて誕生したはずです。

「ワンワン」という言葉が「ワンワン」というものを作らせたわけです。

言語道具説は、言語をただのコミュニケーションの手段と見なします。

が、人間にとて、言語はより根源的なものです。

私たちがこの世界をさまざまなものに分けてとらえられるのは言葉のおかげです。

たとえば、Kポップ。

次から次へと新しいグループが登場します。

グループ名を知っている人は区別できるでしょう。
が、知らない人にとっては、ひとまとめに「Kポップ」のグループです。
逆に、気になるグループがいると、それが何というグループなのか、知りたくなりませんか。
他と区別されたグループとしてちゃんと認識するためには、名前が必要だからです。

名前を知ることで、区別ができるようになります。
逆に、名前のないものを私たちは認識できません。
それをかっこよくいうと、、、
「言葉」こそが「もの」をあらしめている、というのです。

ix) 現実=虚構

言葉が世界の見え方を決めている以上、言語は一種のメガネといえます。

メガネを通して見える世界はその人にとっての「現実」でしょう。
が、世界そのものではありません。
メガネによって歪められた世界です。

同じように、私たち人間が言語を通して見ている世界は、あくまでも、言語によって作り出された、一種の**虚構**、つくりごとですが、私たちにとっては、その世界こそ「現実」です。

だから、私たちが「現実」だと思っているものは、言語によって歪められた世界です。
その意味で、「現実」はウソだといえますが、そのウソは、人間が生きるために必要なウソだということを忘れてはいけません。

私たち人間がウソをつけるのは、ひどい言い方をすれば、そもそもがウソの世界の住人だからです。

でもだからこそ、言葉を使って新しい世界を作り上げることもできる。
科学者が、見えない原子の世界を描けるのも、小説家が、ありもしない異世界や恋愛の話を物語れるのも、そのおかげです。

そういえば、**フィクション** (fiction) は〈虚構〉を意味するとともに、〈小説〉を意味する語ですね。

x) 言語=文化

私たちが言語というメガネをかけて世界を見ているなら、かけるメガネによって世界の見え方は千差万別のはずです。

、、、とわかっていても、これがなかなか外せない。

英語の勉強の時にそれを実感しませんか。
たとえば、私は、「brother」という語を聞いたびに、「『兄』なのか『弟』なのか、はつきりせえー」と思います。

日本語というメガネを外せないまま英語の世界を見るから、このように思ってしまうわけです。

日本語を通して見た世界と英語を通して見た世界が違う——考えてみれば、当たり前です。

逆に、言語が共有されると、世界の見え方が共有されます。

「**文化**」とは〈人間の生の営み〉を空間的な広がりのなかで**共時的**にとらえることです。ある地域に一定の文化の広がりが見られるのは、こうした言語の共有があるからです。言語こそが文化を生み出すのです。

しかし、私たちの見ている「現実」が唯一絶対のものではありません。

私たちは、自言語、自文化というメガネを通して、世界を見ているのであって、それがさまざまな世界の見え方の一つにすぎないことを自覚する必要があります。

それができないとき、私たちは、**自民族中心主義**に陥り、異文化に暮らす人たちを無自覚に傷つけることになります。

xi) 言語の獄屋

が、そのメガネは簡単には外せません。

人間は、まさに**ホモ・ロクエンス** (homo loquens) 、〈言葉をもつ人〉です。

人間は、言語を通して世界を見るようになり、言語なしで生きていくことができなくなりました。

このように言語の世界から抜け出せなくなった人間のあり方を「**言語の獄屋**」とか「**言語の呪縛性**」という表現でしばしば表します。

そのような牢獄からどうやったら抜け出せるのでしょうか。

と考えることも、また言語を介しています。

たとえその牢獄から抜け出せたとしても、その先にあるのは分節されていない世界、「分からぬ」世界です。

そんな世界で、はたして私たちは生きていくのでしょうか。

特に芸術の分野で、言語の向こう側にある世界を描き出す試みはされています。

私たちの生きる言語世界の外に広がる世界を見せてくれるものこそ、芸術なのでしょう。

が、決して簡単なことではありません。

だから私たちにできることは、私たちがせめてやらなければならないことは、自言語、自文化から見た世界を絶対化しないことでしょう。

身近に異言語、異文化があふれる現代だからこそ求められている最低限のマナーだともいえるかもしれません。